図３　特定種のブロックと出土遺物

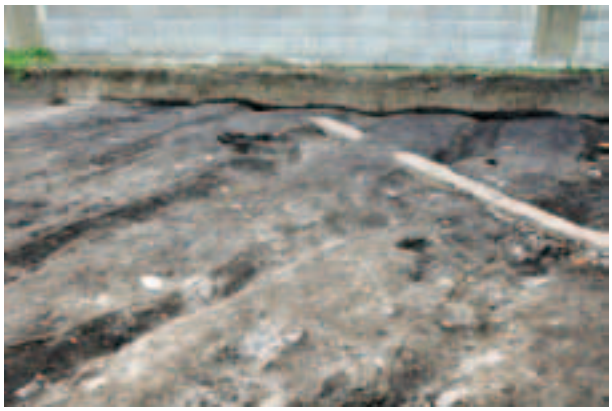

写真２　1640年直後の畑跡（奥壁の土層が波打っているのがわかる）

表２　年齢と墓の構造

	墓No.	時期	人骨年齢	墓の構造
PM12	GP021	1640年以前	3 years ± 12 months	素掘り
US4	GP019	1640年以前	3-4years	素掘り
US4	GP023	不明～1663年	5-6years	素掘り
PM12	GP016	1640～1663年	7 years ± 24 months	木棺・木槨構造
US4	GP022	1640年以前	6-7years	木棺・木槨構造？
PM12	GP015	1640～1663年	9 years ± 24 months	木棺・木槨構造

近年、近世アイヌ文化期の畑跡の検出例が増加し、アイヌ民族の生業のひとつに農耕が含まれることが明らかになってきました。この畑跡も、周囲にアイヌ民族の遺構が多数認められるとともに、和人の生活の痕跡がまったく無いことなどから、近世アイヌ民族によって営まれたものであると考えられます。

また、墓もGP015とGP016の２基が検出されました。いずれも小児の墓で、GP015は９歳前後、GP016は７歳前後です。

丁寧に発掘したところ、この２基は埋葬当時、遺骸の周囲に空間があったことがわかりました。このことは、彼らが成人と同様に木棺に納められて埋葬されたことを示しています（青野・永谷ほか2012）。

先に紹介した３歳前後の小児の墓（GP021）は、木棺を用いない素掘りの墓でしたので年齢によって葬り方が決められていた可能性があります。近隣の有珠４遺跡（US4）で検出された小児墓とあわせて考えると、６～７歳を画期として成人と同様の葬り方をされるものがあらわれたようです（表２）（青野・永谷ほか2012）。

有珠山噴火（1663年）以降

1663年の有珠山噴火より新しい時期の遺構として、アイヌ墓がまとまって検出されました。その総数は16基におよび、検出地点は調査区南側に集中する傾向が認められます。

いずれの墓も墓標穴は見つかっていませんが、重なり合う墓坑がないことから、埋葬後も墓の位置が目に見えて認識できる状態であったと考えられます。

また、調査区の南東部では、４基ほどの墓坑が極めて近い位置関係にあることから、何らかの規則（たとえば世帯や出自など）によってどこに埋葬されるかが決められていた可能性がうかがわれます。

こうしたことから、有珠山噴火以降のこの場所は、単に「墓が集合した場所」なのではなく、「墓地」（「墓地概念」を共有するひとびとによる社会的な空間）として使われた場所であったといえます。

ひとびとは災害とどう向き合ったのか

ここまで概観してきたように、ポンマ遺跡では災害を画期として、遺構の種類・性格が変化していることがわかります。それは、とくに1663年の有珠山噴火の前後において顕著で、有珠山噴火前にはチセや貝塚、畑などが営まれ

る生活空間であったこの地が、噴火後には墓地として利用されるようになったといえます。つまり、火山噴火という大災害が契機となって土地の使われ方が変化したのです。

有珠地区の近世アイヌ史を語る際には、こうした災害がひとびとの暮らしに与えた影響を考慮しなければなりません。それは同時に、有珠山の麓に暮らす私たちの身近な問題でもあります。そこでここからは、有珠地区の近世アイヌ民族が大災害とどう向き合ってきたのかをみていきたいと思います。

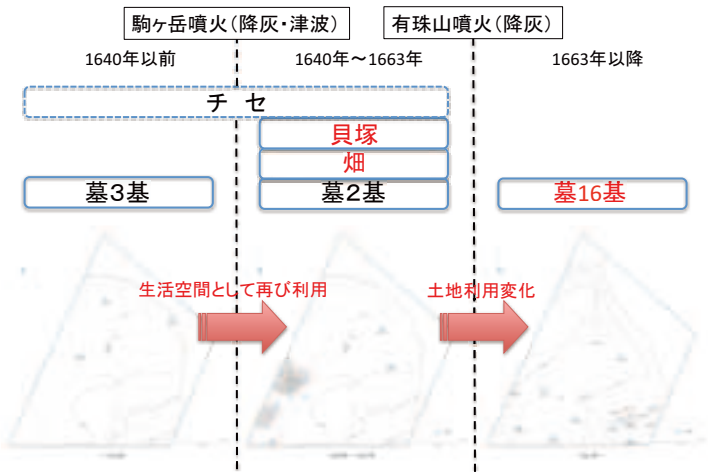

図4　ポンマ遺跡における土地利用の変遷

冒頭で述べたとおり、この地の近世アイヌ民族を襲った大災害は有珠山の噴火だけではありません。1640年に発生した駒ヶ岳噴火とそれに伴う津波も極めて大きな災害で、とくに津波による被害は甚大であったと文献記録に記されています。今回の調査地点で、津波によって運ばれてきた砂が１～５cm程の厚さで調査区一面に堆積しており、被害の大きさを裏付けています。

しかし、1640年前後の遺構変遷をみると、被災後に貝塚や畑などが営まれており、この地がふたたび生活空間として利用されたことがわかります。

ただ、そのわずか23年後にこれらの貝塚や畑は厚い火山灰によって埋まってしまいます。図２には、有珠山噴火前後の遺構配置と、当時の地形を示す等高線を示していますが、これをみると、とくに調査区南東部の地形が噴火の前後で大きく変化していることがわかります。噴火の前までのこの地点は小さな湾入地形を呈する砂丘で、有珠湾の迫る入江が間近にあったと考えられます。こうした地形が、火山灰の厚い堆積によってあたり一面が平坦な地形になってしまったのです。「景観」が一変したこの地は、生活空間ではなく墓地として利用されるようになりました。チセや貝塚などが作られた生活域は、調査地点の南側の微高地に移ったと考えられます。

ここで重要なことは、有珠地区に生きた近世アイヌ民族が、被災を繰り返しながらも、生活空間を再建したり、土地の使い方を変化させたりすることで、この地を利用しつづけたということです。彼らは決してこの地を放棄することなく、生きつづけたのです（図４）。

このことは、有珠という土地が彼らのアイデンティティにとって、欠くことのできない重要なところだったことを示しているのではないでしょうか。

2011年の東日本大震災以降を生きる私たちにとって大切なことをポンマ遺跡の調査は教えてくれたような気がします。

近世アイヌ墓を調査するにあたって

今回の発掘調査では、多数のアイヌ墓が検出されました。調査に携わった私たちは、これらが深い祈りのこめられた埋葬施設であり、そこに納められているのは350年前にこの地に生きた人そのものであるということを常に心に留め、被葬者へ敬意を払い丁寧に調査をすすめました。調査中には、北海道アイヌ協会伊達支部（山崎よし子支部長）の主催による先祖供養の儀式（シンヌラッパ）が執り行われ、土地所有者や発掘関係者などが参列しました。

なお、今回取り上げられた人骨は、東京大学人類学教室による鑑定後、伊達市噴火湾文化研究所内の専用室にて、丁重に保管されます。

【謝辞】
調査にあたっては次の方々からの協力と調査指導を賜りました。

社団法人北海道アイヌ協会伊達支部；山崎よし子、諏訪野楠蔵、諏訪野義雄、厚真町教育委員会；乾 哲也、奈良智法、北海道開拓記念館；添田雄二、登別市教育委員会；菅野修広、室蘭市教育委員会；松田宏介、洞爺湖町教育委員会；角田隆志、三谷智広　（順不同・敬称略）

【ポンマ遺跡2012年度調査に関連する文献】
青野友哉・永谷幸人・近藤修、2012「伊達市ポンマ遺跡における近世アイヌ文化期の小児の埋葬について」『第66回日本人類学会大会　プログラム・抄録集』第66回日本人類学会大会事務局
永谷幸人・青野友哉・河畑敦史、2012「伊達市ポンマ遺跡－近世アイヌ文化期の墓と生活域の調査－」『2012年度遺跡報告会資料集』北海道考古学会